

VIEW21

ビュー21

2013

Vol. 1

中学版

特集

主体的に取り組む 言語活動の工夫

インタビュー 横浜国立大教授 高木展郎

学校事例 佐賀県小城市立三日月中学校 / 大阪府高槻市立冠中学校



私を育てた
あの時代、あの出会い

「師弟同行」という恩師の言葉で教えることの基本を学んだ
千葉県野田市立福田中学校校長 大関健道

新連載

Benesse発
これからの教育

「世界へ」を合言葉に進める国際理解教育 東京都渋谷区立松濤中学校

ミドルリーダーの挑戦
一前へ! 前へ!!

学校全体で取り組む緑化活動が生徒の心を磨き、教師の絆を深める
熊本県熊本市立帯山中学校 水田貴光

特集

3 主体的に取り組む
言語活動の工夫

4 課題整理

言語活動をより深めるために
生徒が主体的に取り組める課題設定を



6 インタビュー

生徒の「分からない」から始まる
あたたかな授業づくり、クラスづくり

横浜国立大教育人間科学部教授、教育人間科学部附属教育デザインセンター長◎高木展郎

10 学校事例1

単元を貫く「リアルな問い」で学びの楽しさや価値に気付かせる
佐賀県小城市立三日中学校

17 学校事例2

生徒の「分からない」を大切に言語活動をつくり上げる
大阪府高槻市立冠中学校

24 まとめ

生徒が主体的に取り組む言語活動に向けて

25 資料

「自立」学習から「自律」学習へ
—自主的に学ぶ姿勢と学習時間、学力の関係—

連載

1 私を育てたあの時代、あの出会い

「師弟同行」という恩師の言葉で教えることの基本を学んだ
千葉県野田市立福田中学校校長◎大関健道

28 Benesse発 これからの教育 **新連載**

「世界へ」を合言葉に進める国際理解教育
東京都渋谷区立松濤中学校

30 ミドルリーダーの挑戦 —前へ!前へ!!

学校全体で取り組む緑化活動が生徒の心を磨き、教師の絆を深める
熊本県熊本市立帯山中学校◎水田貴光

32 読者のページ Reader's VIEW / 編集後記

*本文中のプロフィールはすべて
取材時のものです。
また、敬称略とさせていただきます
*本誌記載の記事、写真の無断複写、
複製及び転載を禁じます

私を育てた
あの時代、あの出会い

第13回

「師弟同行」という恩師の言葉で 教えることの基本を学んだ

千葉県 野田市立福田中学校校長 大関健道 OZeki Kenmichi

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で生徒を育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、大関校長が語る。

生徒と同じ行いをし、真摯に
向き合う大切さを学んだ

初めて担任を受け持ったのは、教師2年目のことです。当時は校内暴力が吹き荒れており、人気だった学園ドラマの影響からか、卒業間際の3年生が木刀を持って放送室を占拠するような時代でした。そんな先輩の姿を見ていた2年生の生徒たちが、3年生になった1学期に机や椅子を教室の窓から放り投げ、教師みんなで止めに入るといふこともありました。まさに体当たりの毎日。当時の倉持治校長は、先生方を信頼し任せ

てくれました。その信頼に応えて何とか突破口を見つけようと、生徒とのかかわり方を模索する日々でした。そんな状況も一段落した2年後、着任した小澤一元校長から言われたのが、「師弟同行」という言葉でした。「生徒と同じ行いをして一緒に歩むことが大切」という意味です。ある年度の始め、トイレ掃除を嫌がる男子生徒がいました。私は怒りたいたい気持ちを抑えて、「一緒にやろう」と生徒を誘い、率先して便器や床の掃除を行いました。すると、最初は嫌がっていた生徒が、1週間が経つ頃には、便器の内側までぞうきんで



おおぜき・けんみち 専門教科は理科(地学)。千葉県柏市立柏中学校、野田市立第一中学校、野田市立川間中学校、野田市教育委員会指導課指導主事、(独)科学技術振興機構理科教育支援センター主任アナリストなどを経て、現職。

1981(昭和56)
千葉県柏市立柏中学校
に新採で赴任

1982(昭和57)
母校である野田市立
第一中学校に赴任

1989(平成元)
野田市立川間中学校
に赴任。1994年度の
千葉県長期研修生
として筑波大で学ぶ

1995(平成7)
野田市立福田中学校
に赴任。全校で
構成的グループ・
エンカウンターの実
践に取り組む

2002(平成14)
野田市教育委員会
指導課指導主事に着
任。野田市教育環境
整備事業や文部科学
省新教育システム開
発プログラム事業に
取り組む

2008(平成20)
野田市立第二中学校
に教頭として赴任。
キャリア教育優良実
践校として表彰を受
ける

2010(平成22)
(独)科学技術振興
機構理科教育支援
センターの主任アナ
リストとして出向

2012(平成24)
野田市立福田中
学校に校長として
赴任。学校支援地
域本部事業を生か
して地域と共に歩
む学校づくりを推
進

*プロフィールは2013年3月時点のものです

「学び、成長し続けることで 1つのモデルを示したい」



きれいにするようになったのです。生徒に命令し、無理にやらせるのは簡単です。しかし、それでは生徒との信頼関係は築けません。掃除だけでなく、鬼ごっこのような遊びまで一緒にやることで、生徒は良い意味で教師を「仲間」だと考えてくれるようになります。また、生徒と同じ行いをするので、生徒に対して1つの「モデル」を示すこともできます。小澤校長は、「師弟同行」という言葉を通して、「教える」こと

の基本を伝えてくれたと思います。「師弟同行」を実践するうちに、私は、教師が生徒と共に活動をすることで、生徒が変わるという手ごたえを徐々に感じるようになりました。しかし、不登校の生徒とのかかわり方には、悩み続けました。生徒の家にいき、ベッドから引きずり出して無理に学校に連れていこうとしたこともありません。ただ、「もつと生徒の心に寄り添う、別の方法があるのではないか」という思いは、常に

私の中にありました。

転機になったのは、ある生徒が2年生の秋に、不登校になった時のことです。何度も家庭訪問を繰り返しましたが、なかなか心を開いてくれません。悩む私を見て、当時の大相平八郎教頭が紹介してくれたのが、市の専門機関で教育相談を担当していた若松律子先生でした。

若松先生は、まず生徒に手紙によるカウンセリングを行いました。そして、生徒が市の相談機関まで通えるようになった3年生の6月頃、私にアドバイスをしてくれたのです。1つは、担任として気持ちを十分理解してあげられなかったことを生徒にわびること。もう1つは、がんばって相談機関に通っていることを褒め、うれしいという気持ちを伝えることでした。私はその意味を考えつつ、生徒に手紙を書き、次に直接会って気持ちを伝えました。すると、生徒は徐々に、私にいろいろなことを話してくれるようになり、秋から毎日、登校するようになったのです。

若松先生には、生徒へのかかわり方や、行動を起こす時のタイミングなど、さまざまなことを教えていただきました。時にはカウンセラーな

どの専門家と連携することで、生徒を良い方向に導けることも、身を以て学びました。そして、もっと本格的に勉強したいと、筑波大の松原達哉教授（当時）が主宰するカウンセリング研究会に参加するようになりました。この研究会への参加がきっかけで、カウンセリング心理学の國分康孝先生や学校心理学の石隈利紀先生に出会い、多くのことを学ばせていただきました。

共に生徒とかわり、 現場の教師と一緒に歩む

校長という立場になりましたが、自分の言動を振り返って反省し、「あれで良かったのだ」と言い聞かせたり、「本当にあれで良かったのだろうか」と思い悩んだりすることが少なくありません。だからこそ、あらゆる人やもの、自然・森羅万象から学ぼうとする「謙虚なこころ」を持ち続けることが大切だと思うのです。

今、学校現場では若手教師の人材育成が急務です。これからも自分自身が学び、成長し続け、共に生徒とかわっていくことによって、教師としての1つのモデルを、先生方に示していければと思っています。

主体的に取り組む 言語活動の 工夫

新課程のねらいを実現する手段として、
思考力・判断力・表現力を高める言語活動の充実に
取り組む学校は多いが、学校現場からは

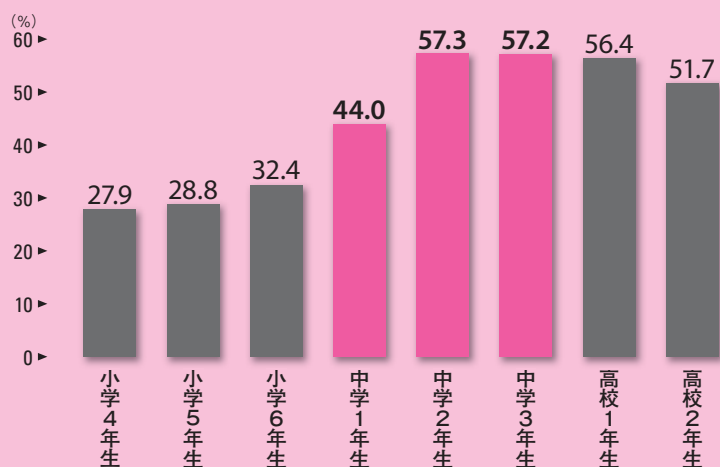
「今一つ、効果的な授業への落とし込み方が分からない」

「言語活動を通して、生徒の思考や判断に深まりが見られない」

という声も聞こえてくる。そこで、今号の特集では、

生徒が主体的に参加する言語活動とするための指導の工夫を考える。

学習に意味を見いだせない子どもは
学年が上がるにつれて増加。中2生で約6割



「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」という質問に、「とても
そう思う」「まあそう思う」と答えた割合

出典/ベネッセ教育研究開発センター「第2回子ども生活実態基本調査」(2009)

言語活動をより深めるために 生徒が主体的に取り組める課題設定を

新課程の移行期間から言語活動の充実をテーマに据えた授業研究に取り組んできた学校は少なくない。学校全体の教育活動に言語活動をどう位置付けるか、取り組みが進む一方、授業への落とし込みについて、さまざまな課題も挙がっている。現在の言語活動の現状と課題を整理し、より効果的な言語活動にするための指導の工夫をまとめる。

『VIEW21』読者モニターの声に見る 「言語活動」の現状と指導の課題

現状

- ・単元の途中で、課題に対する生徒自身の意見を伝えたり、グループで意見交換をさせたりする場を仕組んでいるが、なかなか議論が活性化しない
- ・その日の授業で学んだことを生徒自身の言葉で振り返らせているが、「ためになった」「面白かった」など、短文・感想レベルの内容からなかなか質が向上しない

指導の課題

- ・学校全体で言語活動を通してどのような力を育てたいかの目線はそろってきたが、各教科の指導への落とし込み方が難しい
- ・生徒が言語活動を通して思考、判断、表現した内容について、教師がどこをどう評価し、次の指導につなげていくか、評価指標の設定の仕方が難しい
- ・保護者や生徒が求めている高校受験対策としての知識注入型の授業が、どうしても増えてしまう

課題解決に向けた指導のヒント

理論編

- ・これからの社会で必要とされる力を見据えた上で、必要なことを授業に具体化する
- ・「教える生徒」と「教わる生徒」が固定化しない、学習の本質にかかわる課題を提示する
- ・生徒の「分からない」から授業をつくり、分からない生徒の自己肯定感を高める

▶▶▶ P.6 横浜国立大教授 高木展郎

実践編

- ・生徒の「学びをひらく」ための「リアルな問い」を全ての教科で設定し、学ぶ意味や価値、必然性を高める
- ・教科共通の単元カリキュラムをベースに、教科特性を生かしながら授業改善を行う
- ・授業で生徒同士の活発な対話を促すためには、まず教師同士が教科を超えてどう学ばせたいのかについてアイデアを出し合い、学び合う風土をつくる

▶▶▶ P.10 佐賀県小城市立三日月中学校

- ・「分からないことは良いことである」という意識をクラス全体、学校全体で共有し、生徒の「分からない」を引き出し、そこから授業を組み立てる
- ・「まなびのステップ」を活用することで、教師と生徒で目指す「言語活動」の質の目線合わせを行う
- ・研究授業後の研究協議に生徒も参加し、「授業は自分たちがつくる」という意識を浸透させる

▶▶▶ P.17 大阪府高槻市立冠中学校

生徒の「分からない」から始まる あたたかな授業づくり、クラスづくり

横浜国立大教育人間科学部教授、教育人間科学部附属教育デザインセンター長 高木展郎

新課程が全面实施となつて1年が過ぎた。新課程のねらいを実現するために、今求められている学習観は何か。また、その具現化のために、発想をどのように変えていけばよいのか。横浜国立大教育人間科学部の高木展郎教授に聞いた。

新課程1年目を終えて

教師自身の原体験に依拠した 授業からの脱却が必要

教育観・学習観は人それぞれですが、多くはその人の原体験に基づいてつくられているものだと思います。教育の専門家ではなくても、自分が受けてきた教育を基に、教育のあり方を評論してしまいがちです。それは教師も同じで、自分が受けてきた教育を基にした教育観からなかなか脱却できません。

中学校で新課程が全面实施となり1年が経ちましたが、学校で授業を拝見していると、まだ知識注入型の授業が少なくない印象を受

けます。中学校の学習指導要領は1947年に初めて作成されてから改訂を何度も重ね、学習観は時代に応じて変化してきました。しかし、いくら学習指導要領を変えても、教師が自己の原体験から脱却した指導を行わなければ、教育現場は変わりようがありません。

2007年に学校教育法が改正されて、戦後初めて「学力」の定義がなされました。基礎的・基本的な知識・技能、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力、そして、主体的に学習に取り組む態度。この3つがこれからの時代に求められる「学力」として、授業で何をすべきかを考えていかなければなりません。少なくとも

知識注入型の授業では、学習指導要領のねらいを達成することは出来なくなっているのです。

「高度な専門職」に就く教師として 今求められる学力を見極める

日本の教師は優秀で、授業の質は高く、しかも熱心です。これは今も昔も変わらない、日本の教育の優れた特質です。しかし、学校を取り巻くさまざまな状況が、そうした特質を生かすことを妨げているのも事実です。

例えば、中学校の教師である以上、高校入試は意識せざるを得ません。しかも、授業時間は限られていますから、責任感の強い教師

主体的に取り組む言語活動の工夫



たかぎ・のぶお◎横浜国立大教育学部卒。兵庫教育大大学院学校教育研究科言語系修了。東京都公立中学校教諭、神奈川県立高校教諭、筑波大学附属駒場中学・高等学校教諭、福井大、静岡大を経て現職。著書に『ことばの学びと評価』（三省堂）など。専門分野は教育方法学、国語科教育学。

ほど、皆で考えたり表現したりする場面が大切であることを理解しつつも、教科書の内容を全て教えることに力を注いであって傾向があります。また、保護者にも、「教科書を全て終わらせるのが良い先生」という思い込みがあるようです。

更に、公立中学校が抱える課題に、中学校入学時の生徒の学力差があります。小学校段階で既に学力が開いているために、小学校の学習内容も振り返りながら教える必要があり、授業ではどうしても基礎的な知識や技能を教えることが中心になってしまうという声を聞きます。

しかし、高校入試も変わりつつあります。

例えば、13年度の神奈川県公立高校の入試問題を見ると、理科にはグラフを描かせる問題があり、社会も自分の知識を基に考え、判断し、表現させる問題が出されました。高校入試でも、これまでのようなたくさんの知識を問う問題だけではなくなりつつあるのです。

私は、教師という職業は「高度な専門職」だと考えます。これまでの学校は、知識を効率的に伝授する場としては優れていました。しかし、社会で必要とされる力が変わり、学校教育で育てるべき力が変わった今、これまでも同じ授業では求められる力は育成できません。教師という専門職の立場から、これからの社会を生きていく生徒に必要なことを

しっかりと見極め、授業に具体化することが大切なのです。

主体的な活動を促す

学校は「分からない」を「分かる」ようにする場所

今求められる教育へと転換するために、まずは授業の発想をがらりと変えてみてはどうでしょうか。

例えば、挙手の仕方です。発問をして、「分かった人は手を挙げて」と言う先生は多いと思います。ところが、分かる生徒ばかりに発言させたり、黒板に書かせたりしていると、分からない生徒は黙って座っているだけで、学びの時間にはなっていない。生徒にしてみれば、それはただの苦痛でしかなく、学力や学ぶ意欲の差は広がるばかりです。

授業は学ぶ場であり、分からないことを分かるようにする場所です。ですから、授業では「分からない人、困っている人は手を挙げて」と生徒に投げ掛ける方がよいと思います。すぐには生徒の手は挙がらないかもしれませんが、それでも、教師が粘り強く「授業は分からないことを分かるようにする場だ」と伝えていくことで、生徒は少しずつ安心して手を挙げるようになっていきます。

では、「分からない」生徒が「分かる」ようになるためには、どうすればよいのでしょうか。その手立ての1つが、新課程で重視さ

*プロフィールは2013年3月時点のものです

れている言語活動だと考えます。生徒同士でグループやペアをつくり、授業で学んだことを話し合う機会を設ける。あるいは、分からない生徒に挙手をさせ、どこまで理解している、どこから分からないのかを説明させるのもよいと思います。

こうして生徒が話し合っている間、教師は机間指導をしながら、どの生徒がどこまで理解できているのか、どこでつまづいているのかを把握することが出来ます。長い時間を取る必要はありません。目的を明確にして言語活動を取り入れることによって、生徒の疑問を拾い上げることが出来ます。そして、全体の場でその疑問に答えていけば、どの生徒も「分かる」授業になるのではないのでしょうか。

学習の本質に迫る授業で 生徒の興味を喚起

言語活動として、学び合いを行う場合はいくつかの注意が必要です。分かる生徒が分からない生徒に教える形ばかりにしていると、「教える側」「教わる側」という関係が固定化しがちです。もちろん、学び合いでは、自然と出来る生徒が教える場面が多くなります。それがあまり一方的にならないように、時には、出来る生徒にも分からないような問いを投げ掛け、皆が分からないという状態にするのです。誰も分かる人がいなければ、「みんなで一緒に考えてみよう」と話し合いにもつ

ていきやすくなります。

また、成績のよい生徒でも、単に公式を丸暗記しているだけで、本質を理解していないことがよくあります。数学などでは、正解に導く方法を考えるだけでなく、「なぜこの公式を使うのか」という本質に踏み込むことも必要です。分かったつもりになっている生徒も、実はきちんと理解していないということが認識できれば、より主体的に学習に取り組むはずで。

生徒が話し合いのイメージを持っていないのであれば、生徒に他のクラスの授業を参観させたり、先生方が行われている研究授業や事後研究会に生徒を参加させたりするのも良いと思います。他クラスや他学年の生徒がどのように学んでいるのかを間近に見て「学び方を学ぶ」ことも、大きな刺激となり、生徒が自ら学習に取り組む動機付けになることでしょう。

「あたたかな聞き方」と 「やさしい話し方」を教える

話し合いを行うにしても、自分の考えがなければ活発な交流は望まれません。話し合いの前に、生徒一人ひとりが自分の考えを持つための時間を設けることも不可欠です。

私は、活動前に「1人学び」の時間を設けるのがよいと考えています。話し合いに入る前に、教師が生徒に問いを投げ掛け、ノート

に各自の考えを書かせる。教師は机間指導をして一人ひとりのノートを見ながら、「よいことが書いてあるから後で発表してごらん」「この考え方は、こういう意見が出た後に言うといいよ」というように声を掛けていくのです。この個別指導での声掛けが、生徒同士の活発な交流を促す上で重要です。

もう一つ、生徒同士の交流を活発化させるために大切なことがあります。全ての生徒が積極的に自分の考えを述べたり、分からないことを分からないと言えたりするようなクラスづくりです。それは、教室を生徒が安心していられる居場所にするということでもあります。

そのためには、「あたたかな聞き方」と「やさしい話し方」を教える必要があります。分からないまま教室に座っているつらい気持ち、友だちの前で「分からない」と言うことにどれだけ勇气があることか。みんなで分かるようにするのが本当の友だちであること、生徒に伝えましょう。他の生徒の意見を受容・共感し、尊重する姿勢を養うことは道徳教育としても重要です。

それと並行して、分からないという生徒にも自己肯定感を持たせることが大切です。「分からないことを言えるって、すごいよね」というように、自分が「分からない」と言ったから、今日の授業が出来たということに気付かせるのです。そして、分からないと言うの

主体的に取り組む言語活動の工夫

は良いことであるという意識を、クラス全体、学校全体で共有してください。教師がチームとなって、同じ価値観で生徒と接することで相乗効果も一層高まるはずですよ。

新たな教育課程の編成

知識と活動のバランスの取れた教育課程が重要

言語活動を充実させる一方、知識・技能の習得もおろそかにしてはいけません。限られた授業時数の中で、教えるべき知識は教え、なおかつ十分な活動を取り入れるためには、生徒の実態に合わせて教育課程を工夫する必要があります。

ある単元に10時間充てるとして、7時間は教科書やプリントで知識を教える、3時間は生徒が考える活動を入れるというように、教科ごとに年間計画を立てておくのです。新課程は恐らくあと9年は続くわけですから、研究授業や週案など、この1年の成果と反省を踏まえて、今こそ各教科が年間の教育課程としての教育計画を立てると良いと思います。生徒たちが考える活動が苦手だと思えば、考える時間をたくさん取り、知識がたくさんあると話し合いが活発になると判断するならば、知識を教える時間を多めに取るというように、バランスを考えた教育課程を編成することが大切です。ただし、知識が足りないから一斉授業、み

んな覚えたから話し合いをするというように、単純に時間を振り分ければよいというものではありません。話し合いを進める中で、知識が足りないために議論が停滞する場面があったら、「ここでちょっと調べてみよう」と言って知識を教えるのです。生徒自身も話し合いの中で知識不足を感じているはずですから、意欲的・主体的に学ぼうとするでしょう。知識の習得と言語活動はあくまで「車の両輪」であることを忘れてはなりません。

言語活動の評価

言語活動は思考力・判断力・表現力を高めるための手段

指導計画を立てる際には、評価も一体的に行えるように留意することが大切です。「授業のこの部分では4観点のうちの『思考・判断・表現』をみよう」「この時間は評価は必要ない」といった見極めが大切です。

ただし、言語活動はあくまで、記録、要約、説明、論述、討論といった諸活動を通して、先に述べた学力（知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体的に学ぶ力）を育成するための「手段」です。

例えば、言語活動の中で活発に発言しているからといって、それを「表現力」として評価するのは禁物です。「積極的に発言している」「覚えたことを上手に説明している」ことを、表現力とはいいません。それは、あく

までも言語活動を通じた学力習得のためのプロセスに過ぎないのです。

自分で考えたり判断したりしたことを、自分の言葉でアウトプットできて、はじめて表現力というのです。説明、論述、討論等の言語活動を通して評価するのは、あくまで4観点の1つである「思考・判断・表現」であり、言語活動自体は評価の対象にはならないことを忘れないでいただきたいと思います。

今日の日本の発展を支えているのは、明治以来の教育です。これまでの教育によって、日本は大きく発展してきました。しかし、グローバル化や情報化など日本を取り巻く状況が大きく変化している今、現状にとどまろうとすれば、いずれ必ず行き詰まる時が来るでしょう。未来を生きる生徒のためにも、従来の発想にとらわれず教育を変えていく勇気を教師一人ひとりが持つて、日々の指導改善に向き合っていたいただきたいと思います。

主体的な言語活動にする指導のヒント

- 生徒の「分からない」を中心とした授業づくりを行う
- 学びの本質に迫る問いを投げ掛ける
- 知識の習得や1人学びの時間を確保しながら、バランスよく言語活動を単元に組み込む

単元を貫く「リアルな問い」で 学びの楽しさや価値に気付かせる

佐賀県小城市立三日月中学校

学びの楽しさや価値を実感することが、生徒を主体的な学びへと誘う——。小城市立三日月中学校は、こうした考えの下、社会や学問と結び付く問いの設定、生徒同士の対話を促す学級づくりを行う。全教科で授業改善に取り組む中で、安易に答えを求めず主体的に問いに取り組む姿が増えている。

● 取り組みのねらい

「ひらかれた学び」が
生徒の主体性を引き出す

小城市立三日月中学校は、2011年度に佐賀県の教育課程研究推進校の指定を受け、2年間にわたり「学びをひらく授業の創造」の研究に取り組んできた。研究の原点にあるのは、「学びとは何か」「なぜ人は学ぶのか」という根源的な問いだ。学ぶのは「みんながしているから」「高校受験があるから」だけではない。「もつと知りたい、考えたい」という思いが生徒を自律的な学びへ誘うのであ

り、「分かった」時の生き生きとした顔が教師に教える喜びを感じさせる。

こうした真の学びを追究するために、生徒と教師が協働しながら学びの楽しさを実感できる授業を創造することが研究の目的だ。研究主任の真子靖弘先生は言う。

「取り組みの根底にあるのは、自律した生徒に育ってほしいという思いです。そのためには、教室という限られた環境の中だけで授業を完結させるのではなく、授業が終わった後も題材について考え続けたり、学んだことを基に社会の課題について考えたりする姿勢を養うことが大切だと考えました。このよう

School Data

◎1947（昭和22）年開校。佐賀駅の北西にある小城市の田園地帯に位置する。教育目標は「社会に生きる知恵と力を身に付けた、心豊かな生徒の育成」。2012年度は「学びをひらく授業の創造」を研究テーマに掲げている。



校長◎渡瀬浩介先生

生徒数◎497人 学級数◎15学級（うち特別支援学級2）

所在地◎〒845-0021 佐賀県小城市三日月町長神田 1650

TEL◎0952-73-2016

URL◎<http://www3.saga-ed.jp/school/edq11051/>

公開研究会◎未定

な状態が『学びがひらかれていく』ということであり、その中で生徒は学ぶ楽しさを実感し、自律的・能動的な姿勢を身に付けていくのだと思います」

取り組みの背景には、もう1つ、生徒の気質に対する懸念があった。真子先生は、「生徒は素直すぎて疑うことを知りません。それが長所でもあり短所でもあります」と評する。教師の言葉を受け入れる半面、教師から「ひよっとして違うのでは？」と問い返されると動揺してしまうというのだ。

「教科書にはこう書いてあるけれども、本当にそうなのか。物事を批判的な目で見て、

主体的に取り組む言語活動の工夫

別の方法や考え方があっていいかと思われ、育てる力や態度を育てなければと思えます」

●活動の工夫①

「他者とかかわりながら」「リアルな問い」を追究

「学びをひらく」手段として、研究の柱の1つに据えられたのが「リアルな問い」の設定だ。教科書の問いと違い、社会や学問における問いは正解が1つとは限らず、また正解がないこともよくある。こうした「リアルな問い」を全ての教科で設定し、生徒に取り組みさせることで、学ぶ意味や価値、必然性を感じさせようとしている。

「リアルな問い」は「実社会・実生活に則した問い」と「アカデミックな問い」の2つに大別し、前者は「身近な材料で今までにない電池をつくれるか」（理科）、「ボウリングに行くにはどうしたらよいか」（特別支援教育）といった学習が生活にどう役立つのかを問う内容としている。後者は、「卑弥呼は魏からもらった銅鏡100枚を何に使ったのか」（社会）というように、学問的に解明されていない真理を探究するものとしている。

2つめの柱は「他者とかかわり」だ。この他者とは、「友だち、教師、教材」を指す。「一斉授業は効率的に知識を習得する上では有効ですが、他者と意見を交わしながら、物事を多面的に吟味することには向いていま

せん。他者との対話はそれ自体が面白さをもっているだけでなく、思いもよらない新たな発想や考え方を生み出すこともあります。実社会や学問の世界とのつながりを感じながら対話を繰り返すことで、生徒の学びはひらかれたものになっていくのです」（真子先生）

●活動の工夫②

カリキュラムモデルで教科間の共通理解を得る

研究組織は、校長、教頭、研究主任、研究副主任、研究推進委員による「研究推進委員会」と、その下の「授業づくり研究部会」「学級づくり研究部会」から成る。授業づくり研究部会は「リアルな問い」の創造、問いを追究するための言語活動の具体化、評価方法の開発など、学級づくり研究部会は授業中の対話を促すための学級づくりや教室環境のあり方が、研究テーマだ。メンバーは前者に各教科主任、後者にそれ以外の教師が当てられた。研究に際し、まず教師が戸惑ったのは、リアルな問いの設定と、それに基づく授業計画の立案だった。研究副主任で数学科担当の原渉先生は、次のように明かす。

「私自身、これまでは限られた時間の中で、教科書の内容を最後まで、生徒にいかに分かりやすく説明し、理解させるかを考えて、授業の手順や説明の仕方を工夫してきました。しかし、なぜ学ぶのかといった根源的な問い

小城市立三日月中学校校長

渡瀬浩介 わたせ・こうすけ

「生徒、卒業生にとって、いつも人間味のある教師でいたい」



小城市立三日月中学校
真子靖弘 まなこ・やすひろ
研究主任。社会科担当。「創造的に考えることを、自分自身にも生徒にも求めている」と



小城市立三日月中学校
原渉 はら・わたる
研究副主任。数学科担当。「自分の考えを持ち、将来や夢を自分自身で決められる生徒を育てたい」



小城市立三日月中学校
野中裕恵 のなか・ひろえ
特別支援教育担当。「笑顔で成人式に出られるような、地域でしっかりと生きていける生徒になってほしい」

を考え、教科と生活を結び付けたことがなかったもので、研究主題を示された時は正直、戸惑いました」

これは原先生だけでなく、多くの教師の実感でもあった。そこで、全教科が共通認識をもって取り組むために設定されたのが教科共通のカリキュラムモデルである（P.12 図1）。授業づくりの手順は、次の通りだ。①「リアルな問い」を1単元につき1つ設定し、②他者との対話を通して基礎的・基本的な知識・技能を習得しながら「問い」について考える。③「問い」に対して自分なりの答えを出しな

*プロフィールは2013年3月時点のものです

図1 「学びをひろく単元カリキュラムモデル」

①リアルな問いの共有化

教師もしくは教師と生徒が、単元を貫くリアルな問いを設定する。
 「なぜなんだろう？ 自分なりの答えを見つけ出したい！」
 「この問いの答えを見つけ出すために、これから単元の学習がはじまるんだな」

②リアルな問いの探究

教える過程 リアルな問いの解決に向けて、他者との対話を通して、基礎的・基本的な知識・技能の習得を図る

基礎に降りていく学び 広がっていく学び

考えさせる過程 リアルな問いの解決に向けて、他者との対話を通して基礎的・基本的な知識・技能の活用を図る

③学びの広がり

リアルな問いに対し、自分なりの答えを出しながらも、教室外でもよりよい答えを求めて、関心を持ち続ける

*同校の資料を基に編集部で作成

図2 2年生・数学 連立方程式のワークシート

2章 連立方程式 No.2

『連立方程式は実生活に役立つ場面はあるのか？』

2節 連立方程式の利用

「2012年 J1(18チーム)リーグ戦」ルール
 全34試合で勝ち点を稼ぐ。
 ・勝ちチームに、3点。 ・引き分けは、両チームに1点。 ・負けチームには、得点を与えない。

【みんなで考えよう】☆ 摩正和の予想が正しい☆
 サガン鳥栖の2012年シーズンの勝ち点は、全34試合で勝って57点であってほしい。引き分けの回数と負けの回数が同じであるなら、サガン鳥栖の勝った回数は何回でしょうか？

③文字を2つ使って考えてみよう！！

勝った回数をxとすると、引き分けの回数をyとすると、

$$\begin{cases} 3x + y = 57 \dots \text{①} \\ x + 2y = 34 \dots \text{②} \end{cases}$$

$(x, y) = (16, 9)$

☆①文字を使わなかったとき、②文字を1つ使ったとき、③文字を2つ使ったときで、どのときの考え方が分かりやすかったのでしょうか？その理由も書いてみましょう。

文字を使わなかったときと文字を1つ使ったときより、文字を2つ使ったときの方がよかったです。なぜなら、①、②は予想としていかなかったけれど、③は、2つの文字を使うことで簡単にできたからです。

今、習っている連立方程式が使えたら簡単にできたから/わかりやすかった。

★これからも連立方程式が実生活に役立っている場面があるかを考えていきましょう！！

数学の連立方程式のワークシート。連立方程式の「よさ」を実感させるという目標の下、生徒にとって身近な地元のサッカーチームを題材にした
 *同校の資料をそのまま掲載

がら、なおも関心を持ち続けて、よりよい答えを探し続ける。

カリキュラムモデルには、教科特性によって必ずしも合致しない部分もあった。例えば、理科の教師からは、理科では1単元が長いという指摘があった。また、数学では、最初にある程度知識の習得が必要であるため、問いについて考える時間を多く取れないという問題を抱えていた。

そうした意見に対し、真子先生の示した方針は「出来ることから取り組もう」だった。

「カリキュラムモデルはあくまで見本です。それぞれの教科特性を尊重し、授業を進める

中で改善を施せばよいのです」（真子先生）

理科では、1単元の中に更に細かく単元を設定し、それぞれについて問いをつくった。数学では、単元の途中や最後に、問いについて考えさせる時間を設けた。例えば、2年生の連立方程式では「連立方程式は実生活に役立つ場面はあるのか」という問いを設定し、地元のサッカーチームの試合を題材に用いた。「サガン鳥栖に全34試合で勝ち点57を挙げてほしい。引き分けの回数と負けの回数が同じなら、勝った回数は何回か」という問いを、連立方程式を使って実践させた(図2)。

また、特別支援学級では、言語活動の定義が問題になった。特別支援教育担当の野中裕

恵先生は次のように語る。

「特別支援学級の生徒は言語活動自体が難しいのであれば、ノンバーバルなコミュニケーションも含めて表現活動と捉えてよいのではないかと、真子先生が言われました。書くことや話すこと自体を目的とせず、生徒が正しく自分自身を表現できる力を育てるために何をすればよいのかを考えるきっかけになりました」

このようにして試行錯誤を進める中、教科特性に応じて出来ることをやっていこうという意識が広まり、各教科の指導案も徐々にレベルの高いものに結実していった。

「先生方には県教委の指定を受けた以上、

主体的に取り組む言語活動の工夫

研究を成功させなければいけないという思いがあります。それに対して、私は『大いに失敗しましょう』と言ってきました。研究発表会があるから、報告書をまとめないといけないから、研究をするわけではありません。結果よりも、教師が生徒のために考える過程そのものが大切なのです」(真子先生)

●活動の工夫③

他者を受け入れる学級風土が生徒同士の活発な交流を促す

授業で生徒同士の活発な対話を促すには、良好な人間関係、他者の考えを受け入れる学級風土が重要になる。学級づくり研究部会では、言語活動の質を向上させるための学級づくりの研究を重ねた。

生徒が協働して取り組む雰囲気を培うために、朝の会で行っているのが「リレーションタイム」だ。生徒がペアまたはグループになって、対話やスピーチをするというものだ。例えば、ペアで会話をする時は、座席が隣り合う2人が話し役・聞き役に分かれて1分間ずつ話す。聞き役の子は、相手が話し終わるまで顔を見ながら静かに話を聞き、話が終わったら質問や感想を述べる。テーマは「最近のニュース」「将来の夢」など、日直の生徒が設定する。また、1分間スピーチでは、1回に2人の生徒があらかじめ用意した原稿を基に、学級全員の前でスピーチする。終了

後、聞き手は拍手し、数人が感想を述べる。内容に関する批判はしないのが約束だ。

リレーションタイムは、クラスによって温度差があり取り組みが深まらなかったという反省もあるが、一方で予想以上の効果もあった。生徒会の提案により、13年度から生徒が主体となって取り組みを推進することになったのだ。ゲーム的要素を入れるなど、楽しみながら取り組めるプログラムを生徒会が提案し、内容をより深化させていくという。

●活動の成果

生徒も教師も学び合う雰囲気生まれる

2年にわたる研究は、同校に多くの成果をもたらした。1つは、どの教科も生徒の興味・関心を高める「リアルな問い」を創造できたことだ。渡瀬浩介校長は、その背景として次のことを強調する。

「研究主任の真子先生がトップダウンで指示を出すのではなく、先生方全員が意図を理解し、納得するまで次に進みませんでした。また、どれだけ手間がかかるうとも、先生方が納得するに足る資料を準備し、丁寧に説明しました。常に先を見通して、そこに至るまでの道筋を示し続けたことも、先生方に安心感を与えたはず。一方、原先生は他の先生方の『分からない』という声を代弁して、真子先生との懸け橋となりました。2人

のそうした役割が、取り組みを成功させる原動力になったと思います」

何よりの成果は、他者との対話を楽しみ、そこに価値を見出す生徒の姿だろう。仲間とのコミュニケーションを通して考えが深まり、新しいアイデアが生まれることを実感する生徒が増えると共に、生徒の他者理解が進み、互いを認め合う雰囲気生まれている。教師の間にも、学び合う風土が醸成されつつある。

「問いの設定や指導案の作成まで、真子先生の社会科が常に先行してモデルを示してくださったのが大きかったと思います。社会科がそうなら数学はこうしようというように、自分の教科に置き換えて考えることが出来ました。教師同士で切磋琢磨する中で、教科の壁を越えてより良い方法を学び合おうとする雰囲気が醸成されたと感じます」(原先生)

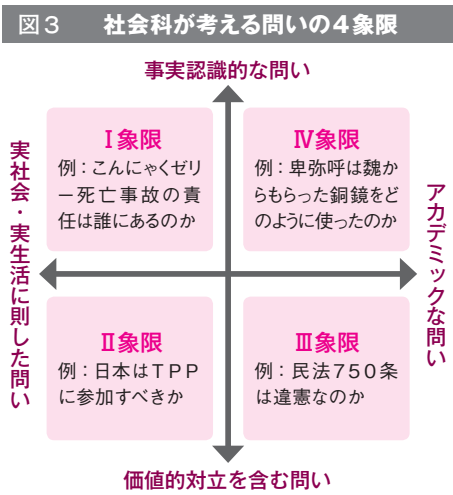
一方、課題もある。一つは、生徒の学力面の向上を定量的に測る評価指標の開発まで至らなかったことだ。「取り組みを教師の自己満足で終わらせないためには、入学時と卒業時の生徒の成長を見取る手立てを考える必要があります」と渡瀬校長は自戒する。

最も大きな課題は、13年度以降も取り組みを継続することだ。研究推進校指定終了後も、これまで通りに教師の意欲を維持し、取り組みの質を更に高めることが出来るのか。同校の取り組みはこれからが正念場となる。

問いの設定から討論まで 生徒主体で授業をつくり上げる

4象限の問いで広い視野と 多様な価値観を学ぶ

社会科では、「社会のより良いあり方を考え続ける生徒」の育成を目標に掲げ、「学びをひらく授業の創造」の研究に取り組んできた。教科共通の方法として、「リアルな問い」と「アカデミックな問い」に分けているが、社会科ではこれに「事実認識的な問い」と「価値的対立を含む問い」を加え、この4象限で問いを設定している(図3)。事実認識的な問いは歴史的・社会的事象について複数の結論が導き出される問いで、価値的対立を含む問いは



*同校の資料を基に編集部で作成

価値観や利害の対立によってもたらされる考
え方の相違を論じるものである。

「客観的な事実からさまざまな見方、考え
方ができると知ること、生徒は社会的事象
に対する興味関心を高め、より幅広い視野や
多様な価値観、バランスの取れた社会認識の
あり方を学ぶのです」(真子先生)

①「リアルな問い」の共有化 生徒の声から「問い」を設定

「アメリカ合衆国は世界のリーダーとして
ふさわしい国なのか」という問いを例に、授
業の進め方を見てみよう(図4)。授業は、
生徒と教師が「リアルな問い」を設定するこ
ろから始まる。問いを設定する上で、真子
先生が意識しているのは次の3点だ。

- ① 単元で習得させたい内容から帰納的に問いを創造する
 - ② 生徒の常識を揺さぶったり疑問を抱いたりする問いになっているかを考える
 - ③ 新聞やニュースに問いづくり役に役立つ情報がないか、日頃からアンテナを張っておく
- 問いの設定は次のように行われた。まず真子先生が宗教問題やエネルギー問題、地球環境問題などのグローバルな課題を紹介し、世

界の国々が協力しなければ解決が難しい問題
であるという共通認識を持たせた。その上で
「各国の協力を引き出すためにリーダーシッ
プを発揮すべき国はどこか」と問い掛けたと
ころ、生徒は「中国」「アメリカ」「日本」と
発言した。次に、それぞれの理由をグループ
やクラスで話し合い、アメリカ合衆国に集約
されたところで前記の問いが設定された。

②「リアルな問い」の探究 教師は「コーディネーター」役

次は「リアルな問い」の探究である。「知
識は物事を習得する過程で習得される」とい
う考えで、真子先生は基礎・基本を習得す
るための探究の過程をこう設定している。

- ① 単元の基礎的知識を問う一問一答形式の学習プリントを、教科書や資料集で予習させ
た上で、教師がポイントを解説
 - ② 身に付けた知識を基に生徒同士の対話を盛り込みながら内容の習得を図る
 - ③ 学習プリントの内容に該当する問題集を解いて復習を行う
- 問いを深めるために特に重視するのが討論会だ。肯定側・否定側が習得した知識や補助資料を使いながら、それぞれリアルな問いに
対する主張文を作成して臨む。
討論会は生徒を入れ替えて2回行う。最初
に肯定側10人、否定側10人、その他20人に
ジャッジや司会、板書を行わせ、2回目に入

主体的に取り組む言語活動の工夫

れ替えるのである。これによって、出来るだけ多くの生徒が発言する機会を確保する。

この単元の討論会は、アメリカの自然や産業、文化など基本事項について一斉授業で学ばせ、問いに対する自分なりの考えを持たせた上で、アメリカのリーダーとしての資質について意見を交わした。肯定側は「農産物の生産量・輸出量が世界一」「世界一の軍事力」を、否定側は「自分勝手な国」「貧富の格差が激しい」などの立論を掲げ、「世界各地の米軍基地の存在」や「銃の所持」などの是非をめぐって反論を展開した。

真子先生は生徒の討論を聞きながら、時折「今の反論はおかしいよ」「最後まで聞いてください」などと注意し、時に脱線しがちな議論の軌道修正をする。この間、先生自身が考

ますので、無理に議論を止めたりはせず、ある程度自由に話させます。生徒や学級の実態、討論の状況に応じて、議論が深まるように導くようにしています」（真子先生）

**③学びの広がり
授業後も探究し続ける生徒たち**

討論後は、真子先生が討論を総括して足りなかった部分、深めたかった部分を整理した後、生徒が肯定・否定の立場を離れて、「アフターシート」にアメリカの国家としての特色を踏まえつつ、リーダーとしての適性について自分の考えをまとめた。

「立論よりも踏み込んだ内容を書く生徒が増えたことは、大きな成果です。また、授業後の休み時間まで討論の内容について『こん

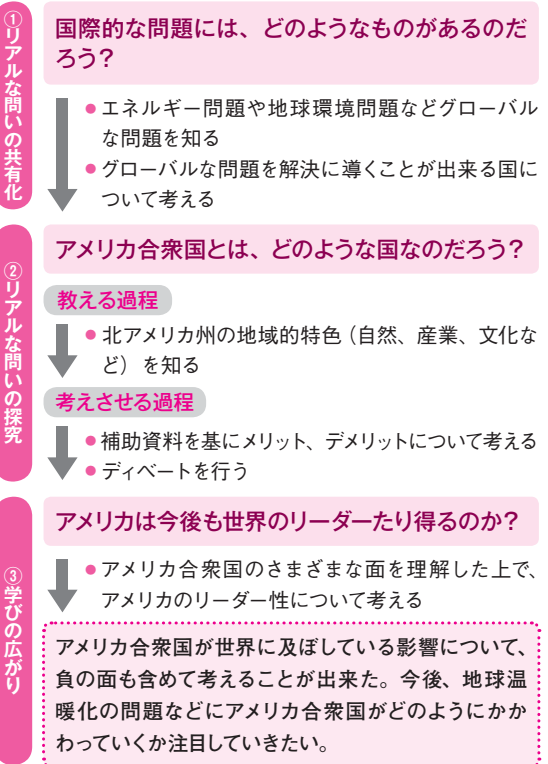
えを述べることはなく、あくまで討論のコーディネーター役に徹する。」

「議論を整理する際は、どこまで流れに任せるか、どこで引き戻すかという点に留意しています。1年生のうちには発言が楽しいと思ってくれればよいと考えています。」

卒業生への追跡調査も行っている。ここには、「高校の社会はあまり楽しくありません。先生の講義を受けるだけなので、自分から学ぶ感じがしません。三日月中時代の討論会の存在の大きさを感ずります」という声が寄せられた。真子先生の授業をきっかけにして、社会のあり方に関して関心を持ち、自分なりの考えを見出し出すとする生徒が現れている。

「今後は、基本事項を出来るだけ網羅した問いの設定、立論や議論の質を高める工夫を重ね、生徒が学びの楽しさを感じられる授業づくりに一層努めていきます」（真子先生）

図4 1年生・社会「北アメリカ州」での指導例



*同校の資料を基に編集部で作成

実生活に根ざした「問い」で 自立した大人を育てる

**労働の意義を学ぶ体験学習で
生徒の主体性を引き出す**

「今日はお金の学習です。先日の校外学習でいくら使ったのか、レシートを基に計算してみましよう」と、野中先生が問い掛けると、生徒は手元の封筒からレシートや残金を取り出し、計算機を使って熱心に計算を始めた。早めに計算を終えた生徒が、終わっていない生徒に声を掛ける姿も見られる。

特別支援学級では、社会と結び付いた「リアルな問い」を重視する。特別支援学級の目標は、個に応じた自立と社会参加を果たす力の育成だ。元々、生活で生きる学習が基本であるため、「リアルな問い」の設定はそれほど難しくないと、野中先生は言う。

「特別支援学級では、生徒の実態や目標に応じて、ある程度自由に単元を組み立てられます。生徒の多くは、小学校まで周りの友だちからしてもらったことが多い立場でした。主体的な活動が苦手なので、意欲的に参加できるように問いを設定しています」

学びの中心は販売学習と校外実習だ。生徒が製作した手芸品を自分たちで販売し、その売り上げで新学期に必要な物品を購入する。

図5 校外実習の流れ

- 1 作業学習…手作りの巾着袋やランチオンマト、マスクなどの縫製製品を製作。
- 2 販売実習…スーパーマーケットの一角を借りて自作製品を販売。
- 3 調べ学習…販売実習で得た収益で新学期に向けて必要な物品を購入。事前にショッピングモールまでの行き方、ショップでの購入方法、お金の計算方法などについての調べ学習を行った。
- 4 校外実習…生徒の力だけで公共交通機関を使ってショッピングモールに行き必要な物品を購入。
- 5 振り返り…校外実習の収支計算、実習の感想文の作成と発表を行った。

*同校の資料を基に編集部で作成

校外学習の目標や感想などの作文を書いて

スピーチの経験を通して コミュニケーション力を育む

労働と収入の関係を学び、働く意義や地域社会で生きることを実感させる(図5)。作業学習で商品製作は行っていたが、新たな要素の1つとして作業日誌の作成を取り入れた。「生徒は思いを言葉で整理することが苦手です。何でも『楽しかった』『面白かった』でまとめる傾向があります。作業直後に取り組みを振り返り、何が楽しかったのか、どのように難しかったのかを一文でもよいので書くことを継続させました」(野中先生)

発表する、週3回のスピーチも取り入れた。スピーチが一方的にならないよう、聞き手が質問や感想を述べる時間も設けた。「スピーチで良かったところを言ってください」と野中先生が問うと、指名された生徒は、「ハキハキと声が出ていた」「具体的で分かりやすかった」とたどたどしくも大きな声で答えた。「仕事では、人の指示を聞いたり助けを求めたりする場面はたくさんあります。自分の考えを人に伝える、相手の話を聞くという経験は、生徒の自立に必要なのです」(野中先生)

生活に結び付いた「リアルな問い」を追究する中で、生徒は自分を表現する力を高めていく。始めは思うように書けなかった作業日誌だが、前回と比較して良かった、悪かったと客観的に評価できる生徒も現れた。また、記録を残すことで新たに出来るようになったことが見えやすくなり、自己肯定感を育むことにもつながっている。スピーチでも、最初は内容と無関係な質問をする生徒もいた。しかし、よく聞き、発表の内容や話し方などについて述べるよう繰り返し指導することで、的を射た質問が出来るようになっていく。

「生徒は一連の学習を通して自分も出来る」と自信を深め、雰囲気明るくなりました。生徒はいつかは自立して、地域の一員として生きていきます。この学びを生活に生かして、自分らしい自立と社会参加を楽しめる大人に成長してほしいと思っています」(野中先生)

生徒の「分からない」を大切に 言語活動をつくり上げる

大阪府 高槻市立冠中学校

2009年に「高槻市授業改善推進モデル校」の指定を受け、学ぶ意欲の向上の研究を行ってきた高槻市立冠中学校。言語活動を中心とした授業、単元全体を見通した授業構成の工夫、生徒も含めた学校全体の研究体制の構築などを行い、生徒の主體的に学ぶ姿勢を引き出している。

◎取り組みのねらい

「学ぶ意欲の向上」で 生徒の荒れを克服

高槻市立冠中学校は、2006年度から「学ぶ意欲の向上」に取り組んできた。その根底には、生徒の学力不振、自尊感情の低さがある。川上真樹子校長は次のように語る。

「本校は以前、大阪府が行う学力検査の結果が平均またはそれ以下になるなど、学力的に厳しい状況が続いていました。自信を持っていない生徒が多く、褒められた経験が少ないためか、自己肯定感もあまり高くありません。

ん。学習意欲を高め、積極的に授業に参加できる環境をつくることは、恒常的な課題です」

同校には以前、生徒が荒れ、生徒指導が中心だった時期があった。組織的な生徒指導を徹底し、06年度からの2年間、「学ぶ意欲を高める授業研究」をテーマに授業改善に取り組んだ。生徒が活躍したり達成感を感じたりする場面を授業に設定して自己肯定感を高めていく中で、生徒は落ち着きを取り戻し、きちんと授業を聴く雰囲気定着していった。

学習環境の整備に続き、学力向上にも取り組んだ。09年度には高槻市教育委員会から研究委嘱を受け、「学ぶ意欲を高め、考える力

School Data

◎1980(昭和55)年開校。知性を磨き、心身を鍛え、人格の陶冶につとめる生徒の育成を目指す。高槻市教育センター「学校教育推進モデル校」、エネルギー環境教育情報センター「エネルギー教育実践校」の指定を受ける。



校長◎川上真樹子先生

生徒数◎461人 学級数◎16学級(うち特別支援学級4)

所在地◎〒569-0031 大阪府高槻市大冠町2-24-1

TEL◎072-676-2567

URL◎<http://www.takatsuki-osk.ed.jp/kamchu/>

公開研究会(予定)◎2013年6月28日(金)、12月2日(月)

を付ける授業の推進」をテーマに、言語活動を中心とする授業改革に着手。以来、3年にわたって「分かる授業の創造」に取り組む、プロセス重視の授業計画、言語活動を中心とする授業づくり、研究事業への生徒の参加など意欲的な取り組みを行ってきた。

◎活動の工夫①

プロセス重視の単元案で 柔軟な授業づくりを実現

取り組みの具体的な内容を見ていこう。

「分かる授業の創造」のポイントの1つは、学びのプロセスを重視した「学習指導案」の

*プロフィールは2013年3月時点のものです

主体的に取り組む言語活動の工夫

ン」があることで「予習・復習がしやすくなった」「授業の進み方が分かるようになった」という声が寄せられた。先を示すことで見通しを持って学びに向かう生徒が増えている。

●活動の工夫②

話し合いが活発になるよう 1人で考える時間を確保

同校が「分かる授業の創造」のために最も力を注ぐのが、言語活動を中心とした授業づくりだ。各時間の学習のねらいや目標に応じて、ペア学習、グループ学習など適切な形態を設定し、生徒と一緒に考えたり自分の意見を述べ合ったりする時間を確保している。

そのための環境整備として、生徒が前に出て発表しやすいように教卓をなくし、言語活動が活発になるようにした。また、「学校は分らないから来るところ」という意識を教師間で共有。それを生徒にも繰り返し伝え、生徒の「分らない」という声を大切にした指導を心掛けている。

言語活動の効果を上げるためには、内容に応じて適切な学習形態を取ることが重要だと、数学科の深田慎也先生は指摘する。

『「分らない時はグループで考えてみよう」ではなく、自分の意見を伝え合う時はペア学習、出来るだけ多くの観点を試してみたい内容で考えた内容はグループ学習にするなど、導入の目的を大切にしています』

グループ学習の前に、課題について生徒が1人で考え、書く時間を確保することも、言語活動を深めるためには欠かせないという。まず1人でじっくり考えた後、他者と考えを交流させることで、分からないことが分かるようになったり、より理解を深めたりできるからだ。教務主任の村山健先生はこう話す。

「グループ学習でよくない例の1つは、出来る生徒だけで議論が進むことです。1人でじっくり考える時間があれば、授業に遅れがちな生徒でも、グループ学習で発言できます。また、その時間は、教師にとってまたとない個別指導の時間になります。机間指導をしながら悩んでいる生徒に助言をしたり、きちんと書いている生徒を褒めたりすることで、生徒は自信を深め、より前向きに活動に取り組むようになります」

どの教科の授業も、毎回、最後に「振り返りシート」にその時間で学んだことを書かせている。自分がどのような力を付けたのかを実感させることで、学習内容の定着、学習意欲の向上を促すのがねらいだ。理科の尾崎元先生は、シートを次のように利用している。

『Aさんの考えが面白かった』『友だちの考えと比べて理解できた』など、生徒同士で交流している様子が分かるものは、授業の最初に生徒に紹介するようにしています。自分たちの活動を仲間がどのように感じているのかを知ること、意識を高める上で有効です』

●活動の工夫③

「まなびのステップ」で 言語活動の質を高める

言語活動の質を高める工夫として、12年度から「まなびのステップ」(写真1)を取り入れ、言語活動そのものを評価する。これは、「聞く」「話し合う」「発表する」それぞれに1〜3のレベルを設定し、自分が言語活動の型をどこまで身に付けているか、実践できているかを生徒に意識させるものだ。

「生徒は、話し合いや発表に楽しさややりがいを感じるようになっていきます。学習内容の評価だけでなく、言語活動の質をきちんと

	レベル1	レベル2	レベル3
聞く	話す人の方に顔を向けて、最後まで聞く	自分の意見と比較しながら聞く	聞き取った内容から、自分の考えを深める
話し合う	目的にそって、みんなで話し合う	互いの考えの共通点や相違点を整理しながら話し合う	相手の発言を大切に話し合い、自分の考えを広げる
発表する	自分の考えを、みんなに届く声で発表する	理由や事例などを挙げて、みんなに自分の考えが伝わるように発表する	互いの意見を比較・検討し、自分の考えをより深めて発表する

写真1 「まなびのステップ」の作成に当たっては、国語の学習指導要領解説の「各学年の目標及び内容の系統表」を参考にした。2012年度に全教室に掲示している

評価することで、学習意欲や自己肯定感が高まるのではないかと考えました。言語活動の型を身に付けるだけでなく、根拠を踏まえて発表する、自分の考えと他人の意見を比較して反論するといった学習を通して、言語運用力も高まると期待しています」（村山先生）

この1年で「まなびのステップ」は生徒に浸透し、「今、自分はどのレベルですか」と聞く生徒も多いという。一方、教科によっては場面によってそぐわないことや、教師によって文言の解釈に幅があることが課題であり、生徒の活動を的確に評価できるよう、運用方法も含めて再検討する。

●活動の工夫④

若手中心の組織づくりが学校に活力を生む

また、研究が各教科の取り組みではなく、学校全体の取り組みになっていることが、活動の大きな推進力となっている。

中核を担う「授業改善推進委員会」の約10人は有志から成り、大半が20代〜30代半ばの若手教師だ。09年度から研究を引っ張ってきた研究部に代わり、12年度に授業改善を担い、若く柔軟な発想で新規の改革を次々と案出している。「まなびのプラン」「まなびのステップ」も、3年間の研究の中で見えてきた課題を基に、委員会が提案したものだ。20代半ばの村山先生が教務主任を任されているよう

に、若手教師が自由に発言し、活躍する機会がある学校風土は同校の大きな強みだ。

「型にはまった組織ではなく、先生方の自主参加という方針は継続します。教師が自分たちで学校を変えていこうという意識を持つる学校であり続けることが、本校の更なる活力になると確信しています」（川上校長）

●活動の成果

「授業は自分たちがつくる」という意識が生徒に浸透

若手教師の活力と共に研究を支える大きな力となっているのは、何といっても生徒の存在だ。同校では、研究授業後の研究協議に生徒が参加し、研究授業や授業改善の取り組みに対する意見を述べる「生徒インタビュー」を行っている。生徒にとっては、大勢の人の前で発表すること自体が言語活動となる。

「教師が授業を変えるためには、自分たちが自身が積極的に発信する重要性を、生徒たちは知っています。11年度の研究協議では、授業は自分たち自身でつくるものという意識が生徒に浸透している様子がうかがえて心強く感じました」（川上校長）

11・12年度に実施した大阪府の学力・学習状況調査の結果では、書くこと、発表すること、考えをまとめること、話し合うことに関する項目で、同校はいずれも府の平均を上回った（図2）。校内アンケートでもペア学

図2 学力・学習状況調査の主な結果

	2011年度(%)	2012年度(%)
国語の授業で、その時間のめあてや目標をはっきり持って活動している	70.9 (42.7)	62.7 (45.2)
国語の授業で意見などを発するとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫している	63.3 (39.2)	51.7 (40.7)
数学の授業で、問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書いている	82.5 (72.0)	76.6 (72.2)
英語の授業で習った表現を用いて、まわりの人や先生、ALTと実際に会話をしている	45.0 (26.0)	42.7 (28.8)
英語の授業で自分の考えや表現を英語でスピーチすることがある	48.3 (31.4)	76.5 (38.0)
普通の授業では、自分の考えを発表する機会がよくある	51.7 (38.8)	64.8 (43.2)
普通の授業では、みんなで話し合う活動をよく行っている	80.9 (42.5)	84.8 (44.1)
普通の授業では自分の考えをノートやプリントにまとめる活動をよく行っている	85.0 (59.1)	75.8 (59.9)
読書が好きですか	82.5 (68.1)	85.5 (68.5)

それぞれ「あてはまる」と答えた数値。()内は大阪府平均。同校では上記の項目で大阪府の平均を上回った
*同校の資料を基に編集部で作成

習やグループ学習が授業内容を理解するために重要だと感じている生徒が9割を超えており、多くの生徒が主体的な学びのためには仲間が存在が欠かせないことを実感している。今後は個々の授業や単元指導案のレベルを更に改善すると共に、「まなびのステップ」の内容も精査していく。また、校区の小学校に「まなびのステップ」の内容の一部を取り入れる連携も検討中だ。

主体的に取り組む言語活動の工夫

数学科

生徒の「分からない」という声を大切に 授業を構成

**分からない生徒を中心に
言語活動を進める**

1年生数学「資料の活用」の授業が始まった。深田先生は、黒板に「資料を整理してその傾向を読み取り、それを説明することができるといふ今日の目標を書いた。「筆箱に入っているペンの数」「持っているゲームソフトの数」など、雑多な数が羅列された資料から表やグラフを作り、それぞれの傾向や特徴を読み解いていくのが、今日の内容だ。

冒頭3分間で、生徒一人ひとりに資料を読み取らせた後、深田先生は「分からなかった人は手を挙げて」と生徒に呼び掛けた。3、4人の生徒がためらうことなく挙手をする。「じゃあ、どうしたら読み取りやすくなるのか方法を考えてみよう」

深田先生の指示に従い、生徒はまずペア学習で話し合った後、4人1組のグループになって本格的な読み取り作業に取り掛かる。「ゼロは入れるの?」「それは少なすぎるよ」と話し合いを進めるグループ、ヒストグラムを作る係や中央値を出す係など役割分担を決めて黙々と作業をこなすグループなど、グループによって方法はさまざま。ただ、誰か

が答えを出してくれるのを待つ生徒は見られない。どの生徒も声を出し、手を使い、頭を使って授業に取り組んでいる。

**相手に説明できてはじめて
理解したことになる**

「生徒が分からないと言えぬ授業をつくる」。これが深田先生のモットーだ。皆の前で「分からない」と言うことは簡単ではない。同校においても、1年生の最初から手を挙げられる生徒は少ない。

そこで、入学直後から生徒に「学校は分からないから来るところ」「分からなくて当たり前」と繰り返し説き、手を挙げた生徒には「よく手を挙げたね」と言いつつ、その勇気を褒める。こうした指導を根気よく続けるうちに、1、2カ月ほどで手が挙がるようになるという。

「生徒の『分からない』という疑問や悩みを引き出し、そこから授業を組み立てるのが教師の役目です。ただあまり言い過ぎると、かえって生徒は手を挙げづらくなるので、さりげなく会話の端々で出すようにしています」(深田先生)

手を挙げる時は周りを見るよう指導する。

ペア学習やグループ学習の前に、誰が分かっているのか、分かっているのか、友だちの状況を把握しておくためだ。そうすることで、分からない生徒は分かっている生徒に声を掛けることができ、出来る生徒は分からない生徒が理解できるように丁寧な説明を心掛けるようになる。

分かっている生徒同士がペアになった場合でも、自分が理解していることを相手に伝えようとしてうまくいかないことも多い。深田先生は「それが言語活動の大切なところ」と強調する。

「分かっているといるという生徒ほど、他者に説明できないことが多々あります。単に公式を当てはめれば良いと思っっているのか、答えは出せるけれども、なぜそうなるのかということとは説明できないのです。相手に分かりやすく説明できて、はじめて理解できたことになるといふことを生徒に気付いてほしいと思います」

**小さな成功体験の積み重ねが
言語活動を活性化させる**

数学が苦手な生徒が積極的に参加するようになる、グループ学習はより活発になる。ただし、こうした生徒はどうしてもグループ内では教えられることが多くなる。苦手な生徒に対しては、一斉指導の際に個別に当てることによって、自信を付けさせるようにして

いると深田先生は言う。答えられない場合は少しづつ質問のハードルを下げていき、必ず何らかの答えを言わせるようにしている。答えられないまま終わると、次から答えなくなる可能性があるからだ。

深田先生が褒めるのは、内容に対する理解に対してだけではない。グループ学習の振り返りの時に「A君はメモを取っていたね」「B班の人たちはグラフを見せながら説明していたね。これは相手に伝える上で大切なことだよ」というように、グループ学習のスキル自体を褒めることも忘れない。「学び方」も学力を付けるために重要であることを、生徒が理解していくからだ。

そんな深田先生も、新任の頃は教科書を教える講義型の授業が中心だった。09年度に研究が始まってからもしくは、どのように入業を組み立てればよいのか、試行錯誤の連続だったという。先進校を訪問して授業を参観し、その手法を取り入れてもなかなかうまくいかず、授業が成立しないこともあったと振り返る。

「いろいろな先生方の授業を見るのはもちろん、私の授業を他の先生に見ていただく機会を何度もつくっていただきました。同じ数学の先生から発問内容についてアドバイスを受けるだけでなく、国語や英語の先生にも意見を聞き、他教科のノウハウも積極的に取り入れました」

「振り返りシート」を 授業改善に活用

「資料の活用」の授業では、グループ学習は予定より10分延長し、最後にグループで生徒が調べたことを共有した。「通学時間の平均が出せた」「ヒストグラムと折れ線グラフを描いた」など、生徒一人ひとりが今日の成果を披露していく。結局、当初予定していたグループごとの全体発表は出来ず、今回の授業に持ち越されたが、「それも想定内のこと」と深田先生は話す。

「1時間の授業で全てを完結させるつもりはありません。『単元指導案』や『まなびのプラン』によって、1単元を通して身に付けさせたい力を明確にしているので、授業時間内に終わらなくても、生徒は安心して授業に付いてきてくれます」

最後は「振り返りシート」を書いて、授業は終わる。学習内容の定着を促すだけでなく、教師が生徒の理解度を測るためにも重要なツールだ。

「自己評価がしっかり出来るようになれば、自分がつまづいた部分を自分で振り返られます。これは教師も同じです。生徒全員のシートをチェックし、生徒が理解できていない部分を把握して、『次回にもう一度説明しよう』というように、授業を組み立て直す際のヒントを得ています」

今後の課題は、家庭学習習慣を付けることだと深田先生は話す。生徒アンケートによって、約半数の生徒が予習・復習が出来ていない実態が明らかになったためだ。

「授業が分かりやすい」と答えた生徒は9割に上りますが、実際に理解している生徒となると、数値はぐっと下がります。授業で分かったけれども、家に帰ったら忘れてしまう生徒は少なくありません。授業で分かったことを家で繰り返し解いてみることで、学習内容はより定着します。家庭学習の重要性を生徒に伝え続けると共に、家庭学習に取り組みやすくするために、より分かりやすい授業を心掛けていく必要性を感じます」（深田先生）



写真2 クラス全員の前では声が出せない生徒も、グループ学習では積極的に発言することが多い。1年間、共に学習を続ける中で、出来ない生徒をフォローしようとする意識も芽生えてくる

主体的に取り組む言語活動の工夫

理科

授業中に1度は発言する機会を 生徒全員に持たせる

理解度にかかわらず 発言する機会を設ける

3年生の理科を担当する尾崎先生が課題に感じているのは、理解の定着度をいかに見取るかということだ。

「振り返りシートに『**う**が分かった』と書いていても、本質を理解していないことがあります。『なんとなく』答えたり説明したりすることに慣れている生徒に、言語活動を通して、分かりやすく正確に伝える力を付けていく必要があります」(尾崎先生)

そのために、授業で最も意識するのは、生徒が分かった内容を発言する機会を設けること。例えば、授業冒頭にはペア学習やグループ学習を行い、前時の振り返りを行う。分からない部分を質問したり、自分の考えを相手に伝えたりして生徒に自信を付けさせ、生徒同士が認め合う雰囲気づくりも行う。

一通り終わった後、「分かりやすく教えてくれたのは誰？」と教師が聞き、上手に説明できた生徒の名前を挙げさせ、全体の前で説明させることもある。成績上位層にとっても、承認される喜びは学習意欲の向上につながる。一方、理科が苦手な最初はノートも開

かなかったような生徒が、周りの生徒に助けられるうちに相手の質問に一生懸命答えるようになり、次第に自信を付けてきている。「自分より理解できていない友だちにも、その子の理解度に合った質問をするなど、生徒同士が相手を気遣いながら上手にコミュニケーションションをしています。学力差にかかわらず話し合い活動が成立するのも、皆で分かるようになりたいという意識がクラス全体に浸透しているからだと思います」(尾崎先生)

学年を追うごとに理科の 学習意欲を高める生徒が増加

単元の終わりには、ペアで自分が分かったところを説明し、理解度を確認する機会も設けている。スタンドに試験管を立てた絵だけを使って炭酸水素ナトリウムの過熱実験について解説したり、天気図を使って寒冷前線の動きを説明させたりする。全てを理解していない生徒にも、分かる部分を説明させる。生徒には、説明に含まれるべき観点を示しておき、聞き手はそれを踏まえて発表者の説明を評価する。理解不足から言葉が詰まるような生徒に対しては、聞き手が観点を見ながらヒントを与えるなど、出来るだけ答えられるよ

うにする。「こうした活動を繰り返すうちに、聞き方も次第に上手になっていきます」と尾崎先生は指摘する。

生徒の学ぶ意欲は着実に高まっている。10年度からの調査では、学年が上がるごとに授業に意欲的に取り組む生徒が増えている。質問に訪れる生徒も増え、その中には理科が苦手な生徒も少なくない。尾崎先生の授業を通して、もっと分かりたい、理科が出来るようになりたいと思う生徒が着実に増えている。

「今の3年生が1年生だった時、教科書の内容を教え込む授業も多かったと思います。研究を通して、私自身も生徒が発表する機会や生徒同士の学び合いの大切さを学びました。これからは、1年生から生徒同士の交流を活発に行い、もっと早い時期から学び合う雰囲気をつくることで、生徒の学ぶ意欲を引き出したいと考えています」(尾崎先生)

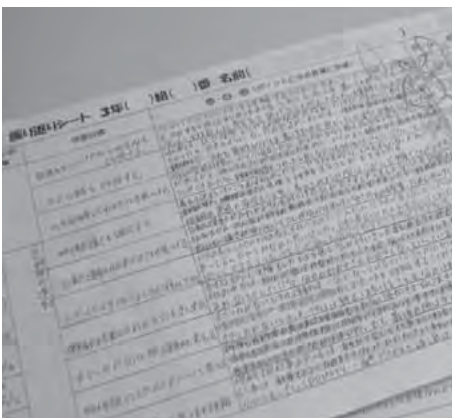


写真3 尾崎先生が担当する授業での、ある生徒の「振り返りシート」。「学習目標」「気・分・思」(気付いたこと、分かったこと、思ったこと)を書かせて、○△で自己評価を付けさせる

生徒が主体的に取り組む言語活動に向けて

言語活動で思考力、判断力、表現力を伸ばしていくためには、生徒が言語活動に主体的に取り組んでいることが重要となる。
 横浜国立大の高木展郎教授、2校の学校事例を通じた編集部からの提案をまとめた。

思考、判断、表現を深めるために まず主体的に学ぶ意欲を育てる

新課程が全面实施となった2012年、秋から冬にかけて多くの中学校で「言語活動の充実を通じた生徒の思考力、判断力、表現力の育成」に関連する研究発表が行われ、編集部ではいくつかの研究発表に参加させていただいた。

これまでの成果として、「言語活動で授業を捉え直すことで、授業を構造化できるようなった」「学校全体で言語活動の充実に取り組む体制が整ってきた」という声がある一方で、「言語活動を取り入れているが、生徒たちの話し合いが活発にならない」「生徒の振り返りの質が感想レベルからなかなか向上しない」「そもそも、生徒に言語活動に必要な基本的な語彙が不足している」といった課題も聞こえてきた。

そこで、本特集では、生徒の思考力や表現

力を高めていくために、どのような言語活動を行えばよいのか、新課程2年目以降、授業づくりの工夫について考えることにした。

高木展郎教授のインタビュー(P.6)では、「成績に関係なく、どの生徒も考えられる本質を突いた問いの設定」、そして「分からない」ことを「分かる」ようにするのが授業であることを、学級全体、学校全体で共有すること」の大切さが指摘された。

授業づくりの工夫のヒントは、佐賀県小城市立三日月中学校や大阪府高槻市立冠中学校の実践に見られた。

小城市立三日月中学校(P.10)は、生徒を自律的な学びへと導くために、生徒が学ぶ意味や価値、必然性を感じられる「リアルな問い」の設定を重視していた。これを実践するために、全教科共通の「単元カリキュラムモデル」を作成。「感覚的」に問いを設定するのではなく、「リアルな問い」を定義し、問題作成の規準を示して、共通認識を図ろう

と全校で取り組んでいる実践は興味深い。

高槻市立冠中学校(P.17)は、生徒が主体的に言語活動に参加できるよう、1人で学ぶ時間を確保して、どこが「分かり」、どこが「分からない」のかを考えさせた上で、生徒の「分からない」を中心とした授業づくりを行っていた。更に、生徒が恥ずかしがらずに自分の「分からない」を発信できる学級づくりをすることで、生徒が自分で考えたプロセスや気づきを伝え合い、主体的に協力しながら課題解決に取り組む学びを促していた。

生徒の状況を踏まえた上で、言語活動の基礎となる思考力、判断力、表現力の型を身に付けさせることから始めるのは、確かに大切だ。ただ、型をしっかり定着させ、更に深めていくためには、まず、生徒たちが授業に「参加したくなる」あるいは「考えたくて仕方がない」という問いの設定や、学びに向かう環境づくりを整えることが重要なのではないか。

「自立」「学習から」「自律」「学習へ

——自主的に学ぶ姿勢と学習時間、学力の関係

生徒の学習を「自立」したことから、更に「自律」したものとへとなるよう指導することで、生徒の家庭学習時間や学力にどのような違いが生まれるのだろうか。調査データを基に分析した。

「神奈川県公立中学校の生徒と保護者に関する調査報告書」調査概要

- **調査主体**／ Benesse教育研究開発センター、東京大学比較教育社会学コース共同研究
- **調査期間**／ 2009年10月～2010年1月
- **調査対象**／ 神奈川県の公立中学校の中学2年生2874人と、その保護者2411人

■ 今回データ分析で使用した変数

◎ 家庭学習時間（平日・休日含む）

「ほとんどしない」を0、「30分くらい」を30、「4時間くらい」を240、「5時間以上」を330として得点化し、その得点を平日については5倍、休日については2倍して合算して算出。「391分以上」を「長い」、「61分～390分」を「中くらい」、「60分以内」を「短い」としている。

◎ 家庭の所有財得点（経済階層）

「美術品（例：絵画）」「食器洗い機」「デジタルカメラ」「プラズマ・液晶テレビ」「文学作品」等、所有財が「5～8個」を上位層、「0～4個」を下位層としている。

◎ 母親の学習関与

「しっかり勉強するように言っていた」について「とてもあてはまる」「まああてはまる」を「しっかり勉強指導あり」、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」を「しっかり勉強指導なし」としている。

◎ 主体的学習意欲（意欲・態度得点）

「わからないことや知らないことがあるとまず自分で調べる」「ものごとがうまくいかないとき自分で原因や解決方法を考える」「うまくいかかわからないことにも意欲的に取り組む」それぞれについて「とてもあてはまる」を4、「まったくあてはまらない」を1として得点化し、9～12点を「高い」、7～8点を「中くらい」、3～6点を「低い」とした。

◎ 意識レベルの自律学習

「できている」は、「勉強積極的」（生徒への質問項目「学校での勉強に積極的に取り組んでいる」について「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答した生徒）かつ「親が言わない」（保護者への質問項目「子どもに『もっと頑張りなさい』と言う」について「あまりない」「まったくない」と回答した保護者）のクロスによって抽出される対象。一方、「できていない」は「勉強積極的」だが、「親が言う」（保護者質問項目「子どもに『もっと頑張りなさい』と言う」について「よくある」「ときどきある」と回答した保護者）のクロスによって抽出される対象。

◎ 行動レベルの自律学習

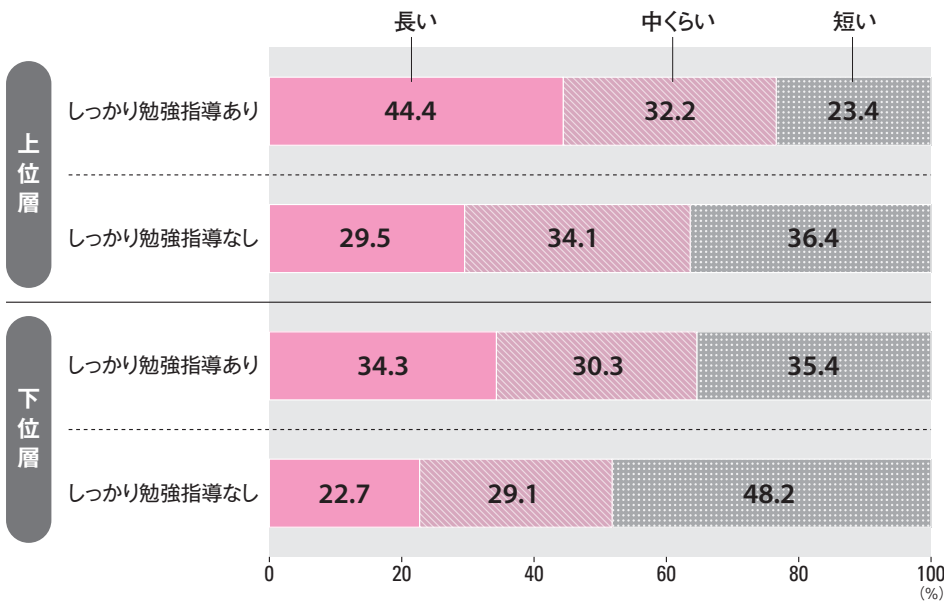
「できている」は平日の家庭学習時間を比率が3等分になるように「長い」「ふつう」「短い」の3グループに分け、平日の家庭学習時間が「長い」「ふつう」かつ「親が言わない」のクロスによって抽出される対象、「できていない」は平日の家庭学習時間が「長い」「ふつう」かつ「親が言う」のクロスによって抽出される対象。

◎ 学業成績

「あなたの成績は同じ学校にいる中学2年生の中でどれくらいだと思いますか」に対する回答を用いて「下のほう」「やや下のほう」を「下位」、「中くらい」を「中位」、「やや上のほう」「上のほう」を「上位」としている。

1 母親が「しっかり勉強するよう」に言っていた生徒ほど、家庭学習時間が長い

■ 中学校入学前に母親が子どもの学習に関する度合いと生徒の家庭学習時間



注1) 結果は全て0.1水準で有意

出典 / Benesse教育研究開発センター「神奈川県公立中学校の生徒と保護者に関する調査報告書」(2010)

家庭の所有財得点（経済階層）と中学校入学以前の母親の学習関与度別に、生徒の家庭学習時間の違いを見ると、家庭の所有財得点の上位層・下位層にかかわらず、母親から中学校入学前に「しっかり勉強するよう」に言われていた生徒ほど、家庭学習時間が長かった。家庭学習習慣の定着と親のかかわりに有意な関連があることが分かる。

2 主体的に学ぶ意欲や態度を持っている生徒ほど、家庭学習時間が長い

■ 生徒の主体的に学ぶ意欲・態度と、家庭学習時間



注1) 結果は全て0.1水準で有意

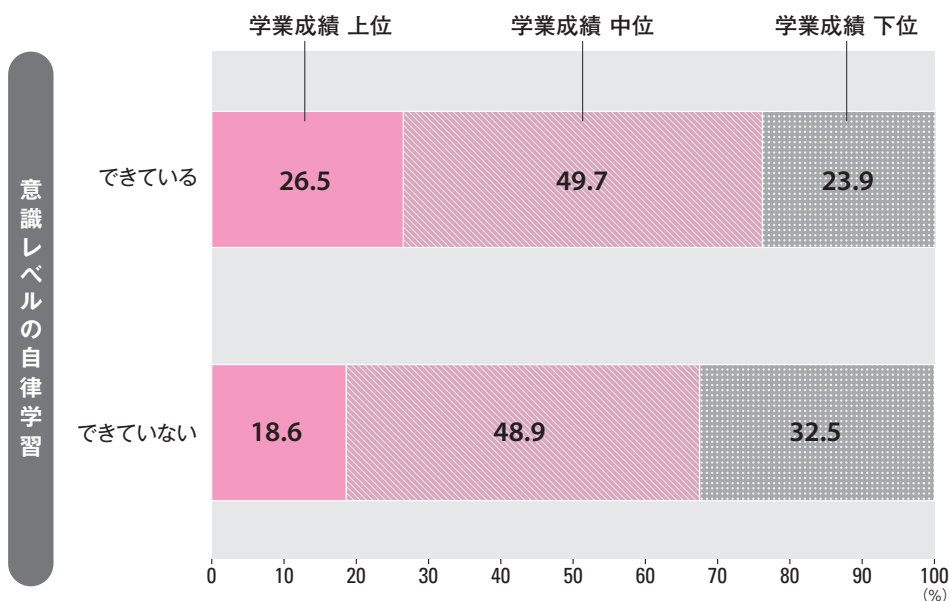
出典 / Benesse教育研究開発センター「神奈川県公立中学校の生徒と保護者に関する調査報告書」(2010)

「ものごとがうまくいかないとき自分で原因や解決方法を考える」「うまくいかかわからないことにも意欲的に取り組む」といった主体的に学びに向かおうとする意欲や態度と家庭学習時間との関係を見ると、家庭の所有財得点（経済階層）の上位層・下位層にかかわらず、主体的に学びに向かう意欲や態度が身に付いている生徒ほど、家庭学習時間が長くなっている。

主体的に取り組む言語活動の工夫

3 学校での学習に同じ程度の意識で取り組む生徒の場合、自律的に学ぶ意識のある生徒ほど学力が高い

■自律的な学習の有無と成績の関係(授業態度が同レベルの場合)

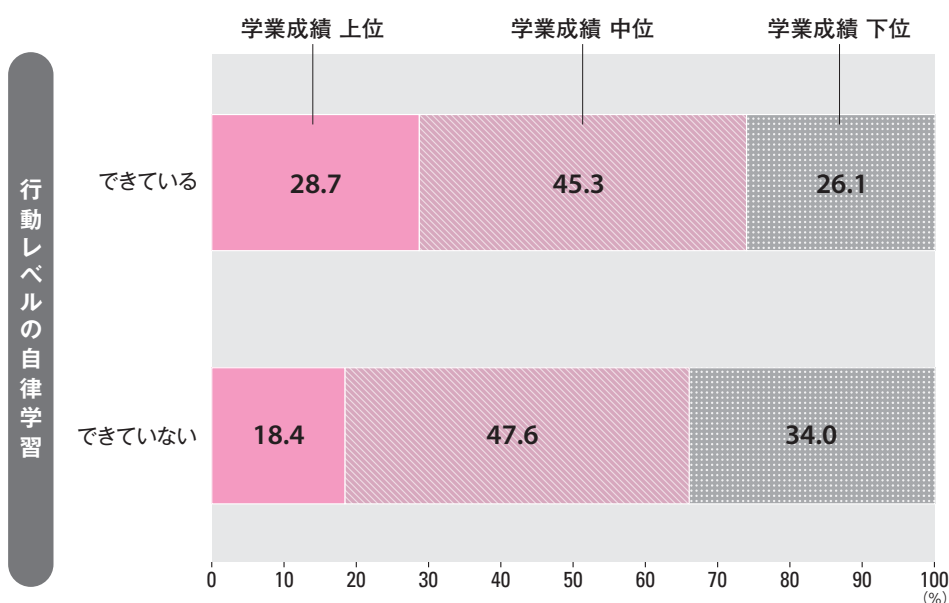


学校での学習に同じ程度の意識で取り組む生徒たちが、親に言われて積極的に勉強に取り組んでいるのか、親に言われなくても自分から積極的に勉強に取り組んでいるのかを学業成績で比較したところ、親に言われなくても自分から勉強に取り組んでいる、自律性の高い学習ができていない生徒ほど学力が高くなっている。

注1) 結果は全て0.1水準で有意
出典/Benesse教育研究開発センター「神奈川県公立中学校の生徒と保護者に関する調査報告書」(2010)

4 家庭学習時間が同じ程度の場合、自律的に学ぶ意識のある生徒ほど学力が高い

■自律的な学習の有無と成績の関係(学習時間が同レベルの場合)



家庭学習時間が同程度の生徒が、親に言われて学習に取り組んでいるのか、親に言われなくても学習に取り組んでいるのかを学業成績で比較したところ、親に言われなくても自分から取り組んでいる、自律性の高い学習ができていない生徒ほど学力が高くなっている。

注1) 結果は全て0.1水準で有意
出典/Benesse教育研究開発センター「神奈川県公立中学校の生徒と保護者に関する調査報告書」(2010)

「世界へ」を合言葉に 進める国際理解教育

次代を見据えた時に、
どのような教育活動が必要となるのか。
先進的な活動を行う
さまざまな事例を通して考える新コーナー。
今号は、授業だけでなく、日常生活や行事にも
英語でのコミュニケーションを取り入れて
国際理解教育を進める学校事例から、
これからのグローバル教育を考える。

School Data



東京都渋谷区立松濤中学校

◎ 1949 (昭和 24) 年開校。専属ALTは4人。
ALTと学校間の通訳、書類の翻訳などを担う
コーディネーターを非常勤で配置。2013年度
にコミュニティスクールとなる。

校長 鈴木富樹 / 生徒数 207人 / 学級数 6学
級 / 所在地 〒150-0046 東京都渋谷区松濤
1-20-4 / TEL 03-3469-2451

URL <http://academic1.plala.or.jp/shoto/>

東京都渋谷区立松濤中学校

「Good morning.」
「Good morning, everyone. Today is...」
渋谷区立松濤中学校の1日は、英語のあ
いさつで始まる。朝の学活は担任とALT
が一緒に行い、英語で連絡事項を伝える。
続いて、15分間の「Morning Lesson」だ。英
語科教師またはALTが各学級に入り、日
替わりのテーマ学習を英語で進めていく。
授業中も、生徒は英語をよく使う。英語

以外に、実技4教科の授業は、教科担当と
ALTのチーム・ティーチングとなる。例
えば、音楽では英語の歌を合唱し、家庭科
では英文のレシピを見て、英語で指導を受
けながら調理する。そして、給食、清掃、
帰りの学活も、ALTと生徒は共に活動を
する。そこでのALTとのやり取りは、も
ちろん英語。雑談も冗談も、生徒は全て英
語で受け答えをする。更に、帰りの学活で、

生徒は「Class Planner」(連絡帳)に1日
の振り返りと連絡事項を英語で書く。
このように、同校の生徒は日常的に英語
を聞き、話し、読み、書く。毎日、ALT
を相手に英語を使うことによって、生徒は
英語での受け答えに慣れていき、やがて自
信が付き、学校行事で外国人と話す機会が
あれば自ら話しかけるようになる。ALT
の Andrew Hinkinson 先生はこう話す。

「日本の中学生はグローバル人材になれ
る素質を十分に持っていると思います。た
だ、世界に出ていくには、少しナイーブだ
と感じています。本校の生徒は私たちALT
と毎日話しますし、学活では企業のビジ
ネスミーティングに出てくる英語を使いま
す。生徒は、アカデミックな英語だけでは
なく、コミュニケーションのための英語を
学び、経験を積んでいます」

集団活動の中で英語を使う

松濤中学校は、2004年度に渋谷区英
語教育重点校、11年度に国際理解教育推進
校の指定を受け、「誰もが喜んで英語を学
びたくなる学校」を掲げて教育活動に取り
組んできた。まず、英語の授業は日本人教
師3人、ALT4人で全6学級を担当。週
4時間の授業は日本人教師とALTのチ
ーム・ティーチングで、2時間は日本人教師
メイン、2時間はALTメインとなる。ク



渋谷区立松濤中学校校長

鈴木富樹

「生徒の視野を広げるために、さまざまな活動を設けていきたい」



渋谷区立松濤中学校

Andrew Hinkinson

イギリス出身。同校に赴任して8年目。「Small steps will go big distance, keep going!」



渋谷区立松濤中学校

Ryan Carter

アメリカ出身。同校に赴任して1年目。「Important to be believing yourself and follow your heart instinct.」

ラスは本人の希望によるものだが基礎と応用の習熟度別となり、1クラス約20人の少人数で行う。

英語教育と共に、外国や日本の文化の理解、共生する態度、自己発信能力の育成にも力を入れる。学校行事の大半は外国人や外国文化とかかわる内容で、弁論大会や英語劇などの発表の機会も多い。例えば、3年生で行う京都・奈良の修学旅行では、立命館大の協力を得て、同大の留学生が1班に2人付き、一緒に京都を観光する。校外学習ではユニセフハウス（2年生）やJICA（3年生）を訪れたり、歌舞伎鑑賞や能楽鑑賞を行ったりと、外国や日本の文化・社会を学ぶ機会を設ける。鈴木富樹校長は、そのねらいを次のように説明する。「国際化が進む社会で、生徒が社会に出る頃には、外国人と一緒に働くことや、隣



写真 ミクロネシア（マーシャル諸島共和国、ミクロネシア連邦、パラオ共和国）の小中学生と教員計80人との1日交流の様子。小中学生と教員が10人ずつ分かれてクラスに入り、授業を行い、給食を食べる。午後はミクロネシア各国と日本、それぞれの伝統芸能を発表する

に外国人が住むことは普通になっているでしょう。そうした環境で自分の考えを伝えるためには、相手が理解できる言葉で話すことはもちろん、相手への思いやりも大切ですね。集団で、しかも英語を使って活動に取り組む中で、そうした力と態度を育てたいと考えています」

国際理解の視点はどの教科にも関連することであり、教師全員が目的意識を共有し、自己改革をしながら教育活動に当たれるのも大きな強みだと、鈴木校長は強調する。

少しずつでも対話の積み重ねが重要

同校は、かつて生徒数が50人を切る時期もあったが、国際理解教育の取り組みが周知された今、入学希望者が入学定員を超えるようになった。同校の教育目標「世界へ松濤中生」は、現行課程となる際、21世紀にふさわしい目標に変えようと、生徒自ら案を出し生徒会で決めたものだ。このことから、生徒が世界を強く意識している様子が見えてくる。英語力も高い。例年、英検を全校生徒の8割程が受験。卒業までに約半数が準2級以上を取得している。また、将来的に留学したいという生徒が6割を超えた年もあったという。

こうした成果は英語教育重点校だから得られたものかもしれない。ただ、他地域でA L Tの経験があるRyan Carter先生は、

こう指摘する。

「現在では1人のA L Tが地域の数校を受け持つシステムが主流ですが、これではA L Tと生徒とのコミュニケーションがどうしても薄くなります。全ての地域でグローバル人材の育成が必要かは分かりませんが、本校のように、特色づくりの一環として各地域の1校にA L Tを集中させることも、1つの方法ではないでしょうか」

Hinkinson先生は、英語教育で重要なのはInteractiveであり、Communicativeであることを強調する。

「A L Tが、Open your textbook to page 10」と指示しても、その後日本人の先生が『教科書の10ページを開けて』と言ったら、生徒はその日本語を待ち、A L Tの言葉には耳を傾けようとはしなくなります。実はこの小さな積み重ねが大きいのです。日本の先生は勉強熱心です。工夫をすれば、A L Tを活用して、生徒同士が英語で話し合ったり、意見を言い合ったりする活動をもっと取り入れられると思います」

小学校5、6年生では11年度から外国語活動が始まり、生徒は英語や国際理解の素養がある程度、身に付けて中学校に入学してくる。そうした意欲や素養を、生徒たちの将来を見据えながら3年間でどう伸ばしていくのか。松濤中学校の取り組みにヒントがあるとさえそうだ。

*プロフィールは2013年3月時点のものです



ミドルリーダーの挑戦
—前へ! 前へ!!

学校全体で取り組む緑化活動が 生徒の心を磨き、教師の絆を深める

熊本県熊本市立帯山中学校 **水田貴光** 42歳



Middle Leader

みずた・たかみつ◎教職歴20年。八代市立日奈久中学校、水俣市立袋中学校、熊本市立東野中学校などに勤務後、同校に赴任して8年目。担当教科は技術・家庭科。環境教育部長。熊本県教育研究会技術・家庭部会事業部長、熊本市教育センター研究員などを兼務。

これまで私が歩いてきた道のり

**信念を持って取り組めば
周りは認めてくれることを
荒れた学校から学んだ**

私が若い頃に赴任したのは、いわゆる荒れた学校でした。授業は成り立たず、注意しても問題行動が後を絶たない。保護者との対応もうまくいかない。教師としての自分の無力さを感じていました。

先輩の先生方を見て、生徒の心を耕すことが大切だと思い、私は緑化活動や清掃活動に力を入れました。顧問を務める陸上部の練習の合間に校内を掃除し、担当の技術家庭の技能を生かし、部員と一緒に花を植え

ました。最初は協力してくれる生徒、先生はわずかでしたが、半年、1年と続けるうちに手伝ってくれる生徒が増えていきました。始めは賛同者が少なくても、信念を持って続けられれば必ず生徒も先生方も協力してくれることを、この体験から学びました。教師のチームワークの下、学校の中で直しを続けた結果、3年後には問題行動を起こす生徒はほとんどいなくなっていました。

**一部の取り組みではなく
学校全体や地域への
広がりを持った緑化活動**

本校で、私は3年前から清掃や緑

化、掲示物などを担当する環境教育部長を務めています。「人が環境をつくり、環境が人を育てる」を目標に掲げ、古閑尚重校長の主導の下で、緑化活動を中心とした改革に取り組んできました。

本校でも以前からあいさつ運動や緑化活動は行われていました。しかし、どこか表面的な取り組みにとどまり、生徒の心に届いていないように感じていました。学校の外に出るとあいさつが出来ない。木や花もただ植えるだけ。たとえ物を壊しても弁償すればよい。生徒の心に響く取り組みにする必要があると感じていました。

最も意識したのは、一部の生徒や教師の取り組みにせず、全校でかわること、校内だけでなく地域にも活動を広げることです。「グリーンタイム」では、月1回、清掃時間を延長し、校内の清掃だけでなく、校庭も清掃し、緑化活動に生徒と教師が一緒に取り組んでいます。また、学校周辺の道路の花壇の整備を、生徒がボランティアで行っています。

学校が一丸となって取り組むための組織づくりも進めました。例えば、学級ごとにある花壇への意識を高め

*プロフィールは2013年3月時点のものです

ようと、毎年7月に「花壇コンクール」を開いています。本校は学級数が34にも及ぶ大規模校で、取り組みのねらいが浸透しづらいので、各学年の緑化委員の教師を通じて教師全員に正しい情報が伝わるように努め

今、私が踏み出そうとしている新たな一歩

生徒が笑顔で、やすらぎ、安心して過ごせる学校をつくっていききたい

私はずっと意識しているのは、生徒と一緒に取り組むこと、自ら行動して背中を見せることです。その姿勢は、環境教育部長になった今も変わりません。生徒と一緒に雑草を抜き、土を耕し、石を拾う。匂いのかきつい牛糞や石灰をまき、スコップで耕して種をまく。最初は面倒くさがっていた生徒も、種をまいてから2週間ほどで芽が出て、茎が太くなっていくのを見るうちに、使命感を持って取り組むようになります。苦労して守り育てた生命に責任感が芽生えるのです。今では、花を傷つける生徒は1人もいません。

ました。また、夏休みには11000人の生徒全員が参加する「夏休み水やりボランティア」を行っています。このように、緑化活動はただ花を植えるのではなく、学級の意識を高める取り組みとなっています。

部活動の指導でも、率先垂範になるように努めてきました。顧問を務める陸上部では、朝練で練習はせず、みんなで植物の世話や清掃活動をしています。責任感を育むことが部活動にもつながると考えるからです。次第に、サッカー部と野球部がグラウンド整備を、ハンドボール部が花壇の清掃を、剣道部が体育館の清掃を、柔道部が土の再生工場の清掃を、吹奏楽部は昇降口を中心に校内の清掃……と、他にもいろいろな部に活動が広がっていききました。

2011年度には「全国学校関係緑化コンクール」で文部科学大臣賞をいただきました。これも、学校主事の専門的な技能を生かしながら、校長を中心として教職員全員で組織的に運営し、また、大勢の生徒がボ

ランティアで協力してくれたからです。外部の機関に評価されたことで、生徒も大いに自信を持つことが出来たと思います。

また、緑化活動を通して、園芸の高校に進みたいという生徒が出てきました。緑化活動が生徒の進路にも影響を与えるものになってきたことは、大きな喜びです。

学校は生徒が安心して過ごせる場

所でなければなりません。学校が、生徒にとつて夢や希望の持てる場所であり続けること。私の夢は、生徒が生き生きとがんばれる学校、安心して通える学校にするための仕組みをつくることです。「安心、やすらぎ、笑顔」のある学校を目指して、目の前の生徒と向き合いながら、理想の実現に一歩ずつ近づいていきたいと思えます。

緑化活動で学校づくり

水田先生の取り組み

◎緑化活動は生徒の心を育むだけではありません。草花の手入れをしながら、気になる生徒に声を掛けて悩みを聞いたり、普段接点の少ない先生方と情報を共有したりすることも出来ます。生徒との心の交流、教師同士のつながりをつくる上でも大切な取り組みとなっています。



同校は学校前の道守花壇の管理を国土交通省から委託され、早朝ボランティアで生徒が手入れをしている。通勤・通学中の人から声を掛けられることを励みにする生徒も多い。

2012 Vol.4 特集「中学1年生の良さを伸ばす」へのご意見

このコーナーでは、編集部へ寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。

*『VIEW21』中学版のバックナンバーは「Benesse教育研究開発センター」ウェブサイト (<http://benesse.jp/berd/>) でご覧いただけます。

◎今までは、1年生のスタート期に厳しく指導し、生徒を無理に中学校生活にはめていましたが、自信＝自覚＝自立＝自律がなければ、自主性や主体性が育たないと感じていました。課題整理で、1年生での指導の重要性が理解でき、国立音楽大の新藤久典教授のインタビューで、1年生の良さを伸ばすポイントが分かりました。1年生を伸ばす意義、姿勢、ポイント、計画（見通し）を若手教師に伝え、導きたいと思います。〔岩手県／K中学校〕

◎新藤教授のインタビューは、まさにそのとおりだと思いました。毎年、1年生を持った先生からは生徒のマイナス面として「……ができない」という言葉がよく聞かれます。また、「発表をよくする」「のびのびと自由である」という伸ばしたい良さを、「落ち着きがない」と捉えてしまうように思います。新藤教授のインタビューを通して、「褒めること」「生徒に任せること」「3年後を見据えること」が大切だと改めて感じました。〔大分県／D中学校〕

◎新入生の4月当初は、学校生活のルールや生活パターンなど、型に当てはめることに、どうしても必死になってしまっている自分に気が付きました。本校も、日上市立多賀中学校の学年生徒会のような組織を中心に行事を

運営していますが、教師の指示どおりにしか動けなかったり、リーダーをなかなか育てられなかったりという課題があります。多賀中学校のように、「自己有用感」を高めるためにはどうすればよいのか、3年間を見据えてリーダーの主体性をどのように育てるのか、また、周りの生徒をそれにどのように協力させ、かかわらせていくのか、考えていくようにしていきたいです。〔富山県／F中学校〕

◎大阪市立淡路中学校の「リトルティーチャー」制度は、中1ギャップ解消のための有効策だと思いました。また、「おいしい言葉」というキーワードは早速、明日から実践します。〔岐阜県／E中学校〕

◎1年生は不安と期待の両方を持って入学してくるので、不安を解消して将来への夢や希望を抱かせるのが、1年生の指導の重要なポイントです。その意味で、吉賀町立柿木中学校の取り組みは、非常に参考になりました。夢や希望を実現するためには、基礎学力の定着が最重要課題で、そのための学校一体となった努力がうかがえる実践だと思っています。実践の結果で、生徒の変容ぶりをもっと述べていただけるとよかったです。〔東京都／O中学校〕

ご両親を亡くされた
お子さま対象

ベネッセ 通信教育奨学制度のご案内

ベネッセコーポレーションでは、震災や事故などによりご両親を亡くされた日本全国のお子さまに、無償で教材をお届けする「ベネッセ 通信教育奨学制度」を2011年に新設いたしました。お子さまの高校卒業までの家庭学習を、〈ベネッセの通信教育サービス〉が全面的に支援してまいります。貴校や周囲にご両親を亡くされたお子さまがいらっしゃいましたら、本制度をお知らせいただけますと幸いです。

◎詳しいご案内は下記サイトをご確認ください

<http://www.benesse.co.jp/mirai/shogaku/>

◎お問い合わせは講座の電話窓口までお願いします
進研ゼミ中学講座 0120-929-100（通話料無料）

*一部のIP電話からは042-679-8565へおかけください（通話料がかかります）

*受付時間10:00～21:00（日曜・祝日・年末年始を除く）

子どもは未来

Benesse 教育研究開発センターは、子どもたちの成長に寄り添う研究と社会への発信を通して、一人ひとりが学びに向かい、今と未来を“よく生きる”ことに貢献することを目指しています。

Benesse® 教育研究開発センター 『VIEW21』編集部

編集後記

「言語活動で思考力や判断力、表現力を伸ばそうと授業づくりの工夫をしているが、なかなか質が深まらない」——今号の特集は、ある先生からいただいた一言から始まりました。次号から中学版担当者が変わります。これまで毎号の企画に対してご意見をくださった全国の先生方、本当にありがとうございました。先生方と共に生徒の学びの課題に向き合った2年間は大変貴重でかけがえない時間でした。引き続き『VIEW21』をよろしく願います。（佐藤）

VIEW21 中学版 2013 Vol.1

2013年5月16日発行 / 通巻第317号

発行人 岡田大介
編集人 谷山和成
発行所 (株)ベネッセコーポレーション
Benesse教育研究開発センター

◎お問い合わせ先

VIEW21編集部

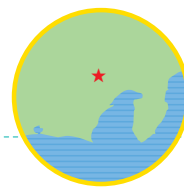
印刷製本 凸版印刷(株)
編集協力 (有)ペンダコ
執筆協力 中丸満
撮影協力 荒川潤、川上一生
イラスト協力 カモ、幸剛

〒206-8686
東京都多摩市落合1-34
電話 042-311-3391

©Benesse Corporation 2013

色とりどりの学びの情景

ふるさとを伝えたい



表紙の学校 静岡県静岡市立井川中学校



藤枝市出身の写真家を講師に迎えて指導を受ける。生徒はそれぞれ「感謝」「道」「きらきら」「木とふれあった」「日常の中の非日常」とテーマを決めて撮影した

写真展は年末年始をさんで1カ月間開催。会場のアンケートには、100人以上から感想が寄せられた

生徒が写したふるさと



地元の幼稚園、小学校と合同の学習発表会には地域住民も訪れる。1人3分間、自分の写真を使いながら、自分が見付けた井川の良さを伝えた

「井川にしかない温かな光を感じました」「心が休まる、優しい場所なんですね」——これは、静岡市立井川中学校の生徒5人が地域を撮影した写真の展覧会に寄せられた感想だ。同校は、南アルプスの山間の小さな学校だ。2010年度から「井川のために今、私たちができること」に取り組み、これまで観光案内パンフレットや駅前の観光案内看板を作成してきた。

2012年度のテーマは「井川の魅力を写真を使って

PRしよう」。生徒は、通学途中、家の近く、お祭りで、思い思いにふるさとを撮影してきた。写真展の開催が決まってからはその枚数は増え続け、講師の写真家と交え、どうしたら自分の思いが伝わるのか、展示する写真や配置を何度も練り上げた。「来場者の感想を読み、この町はすごいと改めて感じました。井川の役に立つようになりたい」と生徒は言う。ふるさとを深く知り、伝えることが、生徒を優しく、そして強くする。

過去1年間の
特集テーマ

Back Number

2012

Vol.4 中学1年生の良さを伸ばす

Vol.3 「自律的な学習者」を育てる学び方指導

Vol.2 主体的な進路選択 —自らの意思と責任で決める力を育てる

Vol.1 「思考力・判断力・表現力」を評価し、育む

すべての記事をウェブサイトからPDFでダウンロードいただけます

<http://benesse.jp/berd/> または で

次号 Vol.2 は8月中旬発行(予定)です